

アスペクト形式の「たて」と「かけ」の 名詞的用法について*

藤巻 一真

要 旨

本稿ではアスペクト形式の「かけ」と「たて」に焦点をあて、基本的な3種類の使用法における叙述に関して、益岡(2008)の分類に基づき記述し、その上で、第4の使用法である「かけ」と「たて」が名詞的に働く使用法（「かけ／たて」節）について、その特徴を記述する。また、これと似た特性を示す主要部内在型関係節との比較を、黒田(2005)における例を中心に行い、その類似点と相違点を明らかにし、「かけ／たて」節はS(IP)であるというよりはNPであることを示す。そして、長谷川(2002)の分析を踏まえ、構造的に「かけ／たて」節はアスペクト形式を含むNP（を補部を取るDP）と捉える可能性を示唆する。

はじめに

時制を持つ動詞（ル形およびタ形）に接続し、その動詞のアスペクト（相）を表す形態素に「ところ」や「ばかり」などがある。

- (1) a. 太郎はランチを食べたところだ。
b. 太郎はランチを食べたばかりだ。
- (2) a. 太郎はランチを食べるところだ。

* 本研究の発端となったのは「たて」構文について議論している山田(2005)である。「たて」構文の特徴について直接、山田昌史氏と話す機会を得た。それから大分時間が経ったが、漸く「たて」構文とは別の使用法（本稿では「たて」節と呼ぶ）に辿り着くことができた。山田昌史氏に感謝申し上げます。言うまでもないが、本稿における誤り等の責任は筆者にある。

b. 太郎はランチを食べる**ばかり**だ。

(1)においては、発話の直前に「ランチを食べることを終えた」ことを表していて、金田一(1955, 76)における「既然態」である¹。(2)は(準備などを終え)これから「ランチを食べる動作に入ること」を表している。これは金田一では「将然態」と呼ばれている²。(1)と(2)の何れの場合も「状態相アスペクト」に分類され「一種の状態動詞」とされている。

ここで用いられている「ところ」や「ばかり」の形式(形態素)は、元々は異なる由来を持つ。例えば「食べたところだ」の「ところ」は、本来、名詞である「ところ」であるが、上記の例においてはそれが助動詞的な機能を果たすようになったと見ることができる。「ばかり」については、本来とりたて助詞である「ばかり」が動詞に付加され助動詞のように振る舞っていると考えることができる³。

同様に、影山(1993)を始めとして多くの研究が成されている(統語的)複合語の中に、V1-V2の形式をとり(3)の「... かける」のようにV2がアスペクトを表すものがある⁴。

- (3) a. 太郎は小説を書き**始めた**。
b. 太郎は小説を書き**かけた**。
c. 太郎は小説を書き**終えた**。

これらは名詞修飾に使われることがあり、(4)のように「... ばかり/ところのNP」や「... 始め/かけのNP」の形式で表される。

¹ 金田一(1955)は金田一(1976)に所収。「既然態」の名前は松下(1924)により、「これ[既然態]は「以前起った動作・作用の結果がまだ残存している」という状態を表すもの」とされる(金田一 1976: 39)。

² 「将然態」とは「ある動作・作用がまだ起こらないが起こる前の状態にある」ということを意味する(金田一 1976: 43)。

³ このような文法化については三宅(2005)、及び、統語構造に関しては影山(1993)、西山・小川(2013)を参照されたい。金田一では、「ところ」は形式名詞とされる。

⁴ 「-かける」については、金田一は「読みかける」には始動態と将現態があるとし、「始動態」の場合は「一部を読んだ」のであり、「将現態」の場合は「全然目を通さないうちにやめた」の意味になるとある(pp.51-52)。尚、「始動態」は佐久間(1957: 165)による呼び方で、その用法に従うとある。

- (4) a. 太郎は[_{NP}書いた**ばかり**の小説]を出版社に送った。
b. 太郎は[_{NP}書き**かけ**の小説]を花子に読んでもらった。

この(4b)と同様のものとして、山田(2005)が「たて」構文と呼ぶものがある。「たて」構文には複合語としての「取れたてる」「揚げたてる」はないものの、基本的に「かけ」構文との類似点が多い。

- (5) a. 太郎は[取れた**たて**のトマト]を頂いた。
b. 太郎は[揚げ**たて**のコロッケ]にソースをかけて食べた。

「取れたてのトマト」は「取れたばかりのトマト」と同義であるから、「たて」も既然態のアスペクトを表している。

本稿では、これらアスペクトを表す「かけ」と「たて」に焦点をあて、これまであまり考察対象とされてこなかった、(6)の形式(「かけ」「たて」に直接格助詞(や後置詞)が接続する使用法)を取り上げ、その特徴を記述する。

- (6) a. 太郎は原稿の書き**かけ**に手を入れた。
b. この牧場ではミルクの搾り**たて**が飲める。

第1節では「かけ」「たて」の基本的な特徴を概観する。第2節では、益岡(2008)の叙述の分類に基づき、「かけ」「たて」がどのような叙述になるかを示す。第3節では「かけ」「たて」の一つの使用法として、(6)に挙げた「NPのVかけ/たて(が・を・に)」のように全体が名詞句として働く例を取り上げ、同様の特徴を持つ主要部内在型関係節と比較しながら、その特徴を記述する。第4節においてまとめ、今後の課題を述べる。

1. 「かけ」と「たて」の基本的特徴

本節では後の分析のために、「かけ」「たて」の基本的な特徴を概観する。まず、「かけ」の基本的な使用法は次の3種類である。

- (7) a. 太郎はパスタを食べ**かけた**。
 b. そのパスタは食べ**かけだ**。
 c. 太郎は食べ**かけの**パスタにラップをした。

「かけ」が動詞の連用形に接続し、アスペクトを表しているのは、(7)のどの例においても同様である⁵。(7a)は V-V の複合語で全体としても V であるが(7b)は、「かける」の連用形である「食べかけ」が名詞としての働き、コピュラ（繫辞）の「だ」を伴い名詞述語を形成し、主語である「そのパスタ」の状態を表している。この点、金田一が「ばかりだ」「ところだ」を「一種の状態動詞」と分析していることが、「かけだ」にも当てはまるといえる。(7c)は、いわゆる「かけ」構文であり、名詞修飾として「食べかけの」が働いている。それはパスタの状態を表していることから考えて(7b)からの派生と考えられる⁶。

次に「たて」を見てみる。基本的には、アスペクトが「已然態」となる点以外は「かけ」と同様である。

- (8) a. *太郎はメロンパンを焼き**たてた**。
 b. そのメロンパンは焼き**たてだ**。
 c. 太郎は焼き**たての**メロンパンをおいしそうに食べた。

⁵ Tsujimura & Iida (1999)における「かけ」の2つの読みであるが、一つは、「食べ物に口を付けていない」読み(inception reading)であり、もう一つは「食べ終わっていない」読み(halfway reading)である。岸本(2000)はこれらを便宜上「開始直前読み」と「途中読み」としている。これらは、それぞれ、金田一のいう「将現態」「始動態」にあたると思われる。

⁶ 時制を伴わない(4b)のタイプの「V かけの N」は「かけ」構文などの名称で呼ばれ Tsujimura & Iida (1999)、Toratani (1998)、Kishimoto (1996)、岸本(2000)、高見・久野(2006)等において、どのような動詞に「かけ」が付加されるのかについて議論され、その統語的、意味的、語用論的条件が提出されている。本稿では、この条件を議論するわけではないので、詳しくは上記先行研究を参照されたい。

ただし、(8a)の V-V に関して注意が必要である。形式的には「V たてる」が可能であるが、「動作を直前に終えたこと」つまり、「太郎はメロンパンを焼いたばかり／ところだ」を表す使用法がないということである⁷。(8b)では、「焼きたて」が主語であるパンの状態を表し、名詞述語となっている。また、(8c)は名詞修飾として働く（「たて」構文の）例である⁸。

ここまで見た「かけ」と「たて」には、本動詞としての使用がある。以下、森田(1994)の説明である。「たて」と「かけ」であるが、元々はそれぞれ「たてる」「かける」という動詞に由来し、動詞の連用形に接続し、強調箇所のようなアスペクトを表す。(7b)と(8b)の使用においては、(接続する動詞を)体言化させる名詞的な接尾辞であるとされる。

(9) 「かけ」

- a. 動詞連用形について、事物にある行為・変化が加わって、まだそれが完全に終わらない**途中の状態のまま**であることを表す。
- b. 動詞的接尾辞「一かける」の**名詞形**。「一かける」は、ある行為や状態の変化に移り始めること。それがまだ完全には進行しない段階をいう。

(森田 1994: 297)

(10) 「たて」

- a. 動詞の連用形に付いて**体言化**させ、その行為がなされてからあまり時が

⁷ 姫野(1999)には複合語における「たてる」の意味として「直立(確立)」「顕彰・拔擢」「構築・達成」「強調・旺盛」が挙げられているが、終わったばかりの意味はない。(8a)も以下の例と同様に繰り返しメロンパンをひっきりなしに焼いている解釈は可能かもしれない。

(i). 太郎はペンキを塗りたてた。

(ii). 太郎はいいわけを書きたてた。 (姫野 1999)

⁸ 山田(2005)において、以下の様にどのタイプの動詞において「たて」構文が可能か分析している。詳しくは山田を参照されたい。

(i). 動作の結果、生産物の登場を予測する作成動詞：書きたての論文

(ii). 完全な結果状態を含意しない変化動詞：揚げたてのコロッケ

(iii). degree achievement である非対格自動詞：固まりたてのゼリー

また、中村(2001)は、「たて」について「ばかり」と比較しながら、その語義について考察しているので参照されたい。

たっていない意を添える。自動詞に付いた例も若干あるが、多くは他動詞について、**その行為が終わったばかりの意を表し、結果的に、他動行為によって生じた事物が、生じて間もないこと、まだ新しい状態にあること**などを表す。(同:662-663)

- b. 動詞「たてる」とは、静止している事物に活動を与えたり、その結果、事物を新たにある状態や位置に持っていき、固定させることでもある。この後者の意味が接尾辞「たて」に発展した。(中略) 行為によって生じる結果の価値を取り立てる意識なのである。(同:663)

(強調筆者付加)

ここまでをまとめると、形式的にはそれぞれ動詞の連用形に「たて」「かけ」が接続し、それらは金田一(1955, 76)でいう将現態や始動態や既然態などのアスペクトを表し、(11)にあるような3種類の使用方法があるということを見てきた。

- (11) a. 動詞複合語: V かける／たてる
b. 名詞述語: V かけだ／たてだ
c. 修飾語: V かけ／たての NP

2. 「かけ」と「たて」の叙述の分類

本節では、「たて」と「かけ」の前述の使用例に関して、益岡(2008)の叙述の分類に基づき、それぞれがどの叙述に属するかを見ておく。

まずは益岡(2008)における叙述の大きな2区分を取り上げる。益岡は「叙述」には以下の「事象叙述」と「属性叙述」があり、(14)にあるような時間的な特性があるとする。

(12) 事象叙述

特定の時空間に実現するイベント（出来事）を述べるものである。

(益岡 2008: 4)

(13) 属性叙述

- a. 対象が有する属性を述べるものである。
- b. 構造的には、対象を表示する部分と属性を表示する部分という2つの部分で構成される。

(14) 属性の大きな2区分：

時間の限定を受けない本質的な属性である「内在的属性」(Inherent Property)と、一定の時間的限定のもとで成り立つ可変的な属性である「非内在的属性」(Non-inherent Property)に大別される。(益岡 2008: 5)

これを基に前述の基本的な使用法を分類してみる。まず、(15a)の「食べかけた」は「食べ始めた」と同様に複合語(複雑述語)の形式をとり、「かけ」は「食べる」動作のどの段階にあるかというアスペクトを表している。上記の分類によれば、特定の時空間における出来事であり、「事象叙述」に分類されるものである⁹。

- (15) a. 太郎はパスタを食べかけた。
b. *太郎はメロンパンを焼きたてた。
c. (統語的) 複雑述語、アスペクト、事象叙述

次に、「かけ」「たて」が、コンピュータの「だ」とともに名詞述語となっている例である。(16)は先ず、有題文の形をとり、「そのパスタ」が「主題」となる。名詞述語の「焼きたてだ」はその「属性」を叙述している。よって「(非内在的) 属性叙述」に分類される¹⁰。この主題は、「かけ」「たて」に接続する動詞の内項である¹¹。

⁹ 「たて」についても、姫野の例の「いいわけを書きたてた」は、事象叙述になる。

¹⁰ また、「太郎はパスタを食べかけた」と言えるとする、「太郎」の属性叙述となる。「太郎は花子が目を離れた瞬間にパスタを食べかけた」と言えても、「太郎は花子が目を離れた瞬間にパスタを食べかけた」とは言えないことから、後者は事象叙述ではないと考えられる。

¹¹ 英語の派生接辞-ableによる以下の(ii)と同様である。

- (i). Children can read these books.
- (ii). These books are readable by children.

「かけ」や「たて」自身の意味はやはりその接続する動詞が表す動作・行為がどの段階にあるかというアスペクトを表している。

- (16) a. そのパスタは食べかけた。
b. そのメロンパンは焼きたてだ。
c. 名詞述語、アスペクト、属性叙述（有題文）

最後に、「かけ」構文や「たて」構文として呼ばれているものであるが、名詞修飾として働き「V かけの NP」「V たての NP」という形式になる。

- (17) a. 太郎は食べかけのパスタにラップをした。
b. 太郎は焼きたてのメロンパンを棚に並べた。
c. 名詞述語、アスペクト、属性叙述

修飾語となっている「V かけ／たての」の部分は、意味としては「パスタ」「メロンパン」の属性を表している。つまり、上記の(16)を元にしており、(15)の事象叙述の文から派生された修飾語ではない。このことは、次の(18a)の時制の伴った関係節とは叙述に関しては異なることから言える。「たて」の関係節としての用法の「焼きたてたメロンパン」には、当該の（「焼きたてのメロンパン」が持つ）意味はないので、「かけ」のみ考察対象とする。）(18a)は事象叙述としての「食べかけた」であり、一方(18b)は「パスタ」の属性叙述としての「食べかけの」である¹²。

- (18) a. 太郎は[_{NP} [食べかけた]パスタ]にラップをした。
b. 太郎は[_{NP} [食べかけの]パスタ]にラップをした。

¹² 次のように特定の「時間」と「場所」を付加すると、関係節では「食べかけ」に「今朝」「キッチンで」がかかる解釈も可能であるが、「食べかけの」には「今朝」や「キッチンで」はかからず、主文の「ラップをした」にかかる解釈のみになる。

(i). 太郎は[_{NP} [今朝／キッチンで食べかけた]パスタ]にラップをした。
(ii). 太郎は今朝／キッチンで[_{NP} [食べかけの]パスタ]にラップをした。

このように、時制のある関係節である「V かけた N」と、時制のない「V かけの N」は叙述の種類解釈において異なる。しかし、Nが動詞Vの内項に当たる点や、「かけ」がアスペクトの意味であることは共通であることから、「V かけの N」における「V かけの」（および「V たての」）は、一種の時制のない、ただし、アスペクトのある関係節と捉えることが可能であろう¹³。

以上、「かけ」「たて」について典型的な3つの使用法について、簡単に構造に言及しながら、叙述の種類について記述した。まとめると次のようになる。

	叙述の種類
(19) a. 太郎はパスタを食べ かけた 。	[事象叙述]
b. そのパスタは食べ かけだ 。	[属性叙述]
c. 太郎は食べ かけの パスタにラップをした。	[属性叙述]

3. 「たて」と「かけ」が物を表す用法

前節で「たて」「かけ」の基本的な特徴を見てきた。その典型的な使用法は以下のような3種類であり、その叙述の特徴を述べた。一つは、事象叙述(20a)で、もう一つは属性叙述(20b)である。この(20b)を元にして、(21)の「V かけ／たての」がNPの修飾語として用いられているが、属性叙述である。

- (20) a. 太郎はそのリンゴを食べ**かけた**。
 b. そのリンゴは（太郎の）食べ**かけだ**。
- (21) a. 太郎は食べ**かけの**リンゴを手にとって皿においた。
 b. 花子は焼きたてのパンを手にとった。

特に、(21)の「かけ」構文に関しては注6に挙げたように、多くの研究がなされている。本稿では、「たて」や「かけ」がどのような動詞を取るか、また、そのと

¹³ これに関しては、第3節の最後にその可能性に関して触れるが、紙幅の関係で詳しく議論できない。

きの意味を議論するわけではないので、詳しくはそちらを参照されたい。以下本節では、これらとは異なるもう一つの使用法について考察する。

3. 1 「かけ」「たて」:(アスペクト) 節が名詞を表すとき

本項では、第4の使用法として以下のような例を取り上げ、その基本的な特徴を記述する。

- (22) a. 太郎は[リンゴの食べ**かけ**]を手にとって食べた。
b. 太郎は[パンの焼きた**たて**]を口にほおばった。

形式的には以下の(24)のようであり、意味的には前節で見た「かけ」や「たて」が表すアスペクトの段階にあるという「状態」(属性)自身を持ちながらも、実際は全体でNPを表している点が特徴である^{14 15}。(22)はそれぞれ、(23)にある「Vかけ/たてのNP」と同等の「食べかけのリンゴ」「焼きたてのパン」を意味している。つまり、その状態にある物を表しているのである。

- (23) a. 太郎は[食べ**かけ**のリンゴ]を手にとって食べた。
b. 太郎は[焼きた**たて**のパン]を口にほおばった。

- (24) 「かけ」節と「たて」節
- a. NP の V かけ = V かけの NP
b. NP の V たて = V たての NP

(22)においてNPに当たるのは、Vから見ると項(基本的に内項)であることも考

¹⁴ 動詞の連用形は名詞として用いられ、様々な意味になり得る。伊藤・杉岡(2002)には、次の例が挙げられている。行為(ゴミ拾い)、人・道具(ピアノ弾き、爪切り)、性質(マンガ好き)や、産物(梅干し、野菜のため)などがある。「食べかけ」「焼きたて」も物や産物を表しているが、具体的な値は「NPの」が決定している。「メロンパンの焼きたて」「カレーパンの揚げたて」において、それぞれ「NPの」に当たる「メロンパン」と「カレーパン」なる。

¹⁵ また、Tsumimura (1992)等で、同じアスペクトとされる「中」にはこの使用法がない。

(i). #太郎は原稿の執筆中に手を入れた。
(ii). #太郎は傷の治療中に薬を塗った。

慮に入れ、さらに「かけ」「たて」がアスペクトを表すことを考慮に入れると、時制を取れないもののアスペクトを取る（関係）節と捉えることができる。これらを前述の使用法と区別するため、便宜上「かけ」節と「たて」節と呼ぶことにする。（特徴の似ている主要部内在型関係節と比較することからも「節」とする。）

その他の例として以下のようなものがある。(26)は「かけ」節の例であり、(27)は「たて」節の例である。

- (25) a. 花子はセーターの編み**かけ**を隠した。
b. 花子はたばこの吸い**かけ**に火をともした。
c. 花子は原稿の書き**かけ**に手を入れた。
d. 花子は傷の治り**かけ**に薬を塗った。
- (26) a. 花子はその牧場でミルクの搾り**たて**を味わった。
b. 花子は天ぶらの揚げ**たて**に手を伸ばした。
c. 花子はコーヒーの入れ**たて**にミルクを入れた。
d. 花子は傷の治り**たて**に薬を塗った。

これらの例において「NP の V かけ／たて」が表しているのは、「かけ」「たて」が本来持っている状態を表しながらも、NP 自体である。これは、(25)(26)から「NP の」を取ると、容認度がかなり下がることから支持される。

- (27) a. ?*花子は編み**かけ**を隠した。
b. ?*花子は書き**かけ**に手を入れた。
c. ?*花子は治り**かけ**に薬を塗った。
- (28) a. ?*花子はその牧場で搾り**たて**を味わった。
b. ?*花子は揚げ**たて**に手を伸ばした。
c. ?*花子は治り**たて**に薬を塗った。

但し、以下の例においては「V かけ／たて＋格助詞」が容認される。一つ目は、

久野(1973)でいう主語化の例である。それぞれ「牛肉の腐りかけが」「野菜の取れたてが」から「牛肉」と「野菜」が主語化され、そして主題となっている。

- (29) a. 牛肉は／が、腐りかけがおいしい。
b. 野菜は／が、取れたてが一番おいしい。

もう一つは、主題化である。(30a)においては「天ぷらは」が主題となり、揚げたてなのは「天ぷら」であり、それを食べるという意味である。

- (30) a. 天ぷらは、揚げたてをたべるのが一番だ。
b. 傷は、治りかけ／たてを大事にしないといけない。

いずれも、主題に対応する「NP の」にあたる「その」を入れることもできる。

- (31) a. 牛肉は／が、その腐りかけがおいしい。
b. 野菜は／が、その取れたてが一番おいしい。
c. 天ぷらは、その揚げたてをたべるのが一番だ。
d. 傷は、その治りかけ／たてを大事にしないといけない。

また、以下のように非文と言えない場合は、文脈から「NP の」を補っている可能性がある。また、一般的な特徴を述べる場合はその傾向にあるようである。

- (32) a. 灰皿にはいつも(たばこの) 吸いかけがおいてあった。
b. その牧場では(牛乳の) 搾りたてが味わえる。¹⁶

以上、本来アスペクトを表す形式の「かけ」「たて」が、あたかも「かけ」構文「たて」構文と同様に振る舞い、名詞句(NP)として解釈される「かけ」節と「たて」節の基本的な特徴を見てきた。

¹⁶ この文と(i)を比較すると、(i)においては文脈がないと何か不足しているように感じる。
(i) その牧場では、搾りたてを飲んだ。

3. 2 主要部内在型関係節との比較

本項では、上記の第4の使用法と、(33)に挙げた主要部内在型関係節¹⁷とを比較し、その共通点と相違点を明らかにする¹⁸。

- (33) a. 駅で酔っ払いが騒いでいたのが警官に捕まった。
b. 太郎が林檎が皿の上にあるのを取った。
c. 田中が学生たちが歩いてくるのに出会った。 (黒田 2005)

例えば(33b)であるが、「林檎が皿の上にあるの」の部分であるが、後ろに格助詞の「を」を取り、「取った」の対象として「林檎」の解釈がこの「林檎が皿の上にあるの」の全体にある。黒田は、この主要部内在型関係節は、名詞句としての特徴を示し、意味役割 (θ -role) が与えられる位置に現れる S であるということを議論している。以下、主要部内在型関係節における基本的な特徴と「かけ／たて」節の特徴を比較する¹⁹。

先ず、(33)にある主要部内在型関係節は、ガーノ交替が可能である。

- (34) a. 太郎が林檎が皿の上にあるのを手に取って食べた。
b. 太郎が林檎の皿の上にあるのを手に取って食べた。

一方で、「かけ／たて節」は(35)にあるように、「NPのVかけ／たて」と言っても「NPがVかけ／たて」とは言えない。つまり、「かけ／たて」節の内部に格助詞の「が」(及び「を」格)が許されないということであり、これはちょうど「リン

¹⁷ Kuroda (1974, 75/76, 76/77), 黒田(2005)及び三原(1994), Hoshi (1995), 坪本(1991), 長谷川(2002)などにおいてその統語的、意味的特徴が論じられ、多くの研究が成されている。詳しい議論はこれらの研究を参照されたい。用語に関して、黒田は「主辞内在型関係節」と呼ぶが、本稿では一般的な呼び方の「主要部内在型関係節」を用いる。

¹⁸ 本来であればトコロ節との比較も必要であるが、別稿に譲る。

¹⁹ 複合名詞句制約の例および WH 島の例は比較対象から除外する。ただし、長谷川(2002)にある重要な例の「?太郎がみんなが花子が本を買ってきたことを信じているのを取り上げた」であるが、これを元に「かけ」節を作ると「太郎がみんなが花子が本を買ってきたことの信じかけを取り上げた」になるが、判断は微妙であるが、完全に不適格とは言えないように思える。

ゴの食べ方」と言えるのに「リンゴを食べ方」と言えないのと同じ状況といえる。つまり、「食べかけ／たて」は名詞として働いているということである。

- (35) a. *太郎はリンゴ**が**食べかけを手にとって食べた。²⁰
b. *太郎はパン**が**焼きたてを口にほおぼった。
c. 太郎はリンゴ**の**食べかけを手にとって食べた。
d. 太郎はパン**の**焼きたてを口にほおぼった。

次に、主要部内在型関係節は黒田によると S であり、意味役割の与えられる位置に現れるので、名詞述語の位置に現れないとされる。

- (36) a. あの男が銀行から出てきた強盗です。
b. *あの男が銀行から出てきたのです。 (黒田の(104)と(105))

黒田は、一般にコンピュータの「だ」の前に「の」が現れないとする坪本(1991)による説明から(36b)の不適合性が説明できる可能性があるとして、(37)の「～にみえる」という述語を用いて名詞述語の位置に主要部内在型関係節が現れないということを示している。

- (37) a. この絵はピカソが描いた肖像画にみえる。
b. *この絵はピカソが肖像画を描いたのにみえる。
(黒田の(112)と(113))

さて、「かけ／たて」節であるが、以下に示すように(36)のコンピュータの前も、「～にみえる」もどちらも可能である。

- (38) a. こちらは、原稿の書きかけです。

²⁰ 主要部内在型関係節を用いて「太郎はリンゴ**が**食べかけ**の**を3つ手に取って食べた」や「太郎はパン**が**焼きたて**の**を3つ口にほおぼった」とは言える。こちらも比較対象とすべきであるが、黒田の例との比較で話を進める。

- b. こちらは、天ぶらの揚げたてです。(揚げたてになります。)
- (39) a. この絵は描きかけにみえる。
b. このパンは焼きたてにみえる。

長谷川(2002)は、黒田の洞察及び分析の一部を引き継ぐものの、その理論的問題点を指摘し、主要部内在型関係節の DP 分析(DP の補部に IP が現れる分析)を提出している²¹。それによると、(37b)が不適格なのは、主要部内在型関係節が DP であるならば、コンピュータの前に現れて、名詞述語になるのは NP であり DP でないからであると説明される。そうであるとする、「かけ／たて」節とここで呼ぶものはコンピュータの後や「～にみえる」に現れることから NP として分析されることになる。

次に主要部内在型関係節は数量詞の遊離が可能である。

- (40) a. 田中が男の学生が坂を降りてきたのを三人と女の学生が坂を上がっていったのを二人同時に見かけた。
b. 男の学生が坂を降りてきたのが三人と女の学生が坂を上がっていったのが二人途中で出会った。
c. 男の学生が坂を降りてきたのに三人と女の学生が坂を上がっていったのに二人途中で出会った。
(黒田の(61)～(62))

「かけ／たて」節も次のように数量詞の遊離が可能である。

- (41) a. 太郎はリンゴの食べかけを手に **3 個**取って食べた。
b. 太郎はパンの焼きたてを口に **2 個**ほおばった。
c. 太郎はピザの食べかけを **2 切れ**と天ぶらの揚げたてを **2 つ**同時に口に

²¹ 紙幅の関係で長谷川(2002)をここで詳しく議論を取り上げることができないが、D が補部に直接 IP を取る構造を主要部内在型関係節に与えている。これにより、さらに関連する他の現象をも含めて説明が可能となっている。以下の(42)の非文法性も、NP が無いことから説明される。

入れた。

次に、主要部内在型関係節は、決定詞や形容詞の修飾を受け得ないとされている (Tsubomoto 1981, Ohara 1994 他) ²²。

- (42) a. *そのメリーが林檎を買ってきたのがあそこにある。
b. *赤いメリーが林檎を買ってきたのがあそこにある。

これに関しては、(43)が示すように「かけ／たて」節は可能である。

- (43) a. 太郎は**その**リンゴの**食べかけ**を手にとって食べた。
b. 太郎は**赤い**リンゴの**食べかけ**を手にとって食べた。
c. 太郎は**その**パンの**焼きたて**を口にほおばった。
d. 太郎は**大きな**パンの**焼きたて**を口にほおばった。

ここで注意点として、ここでの「その」や「赤い」は、「そのリンゴ」や「赤いリンゴ」ではなく、「その」と「赤い」は「リンゴの食べかけ」全体（ただし、それは「リンゴ」）にかかる解釈が可能だということである。つまり、[その／大きな[パンの焼きたて]]になっているのである²³。

次の(44)の数量詞の場合も同様である。「2個の」は「2個のリンゴ」や「2個のパン」で、その「食べかけ」や「焼きたて」の解釈ではなく、「2個の」が

²² これに関して、一つ黒田の分類に関して見ておく。黒田は議論に先立ち、デ関係節、ノ関係節、トコロ関係節と区別している。ここでの議論に関係するのは、ノ関係節である。以下の例では、「大きな林檎の」と形容詞の修飾が可能であるが、主要部内在型関係節からガーノ交替を経て得られたものではないとし、ノ関係節と呼ぶ (黒田 2005: 174; 黒田 1999: 107)。

(i). 大きな林檎の赤いのが机の上にある。

(ii). 太郎が大きな林檎の赤いのを取って食べた。 (黒田 2005 の(14)と(15))

「大きな林檎の」がこの関係節の主辞 (主要部) であり、「赤いのは後置修飾の関係節ということになる (Kuroda 1992)。

²³ (43)において「赤いリンゴの、食べかけを」と「赤いリンゴの」の後に間をおくと可能に思われる。その場合、「赤いリンゴで、(その) 食べかけを」と同じ解釈になるであろう。(44)の「2個の」も同様である。これは、黒田でいう(45)のノ関係節と同じ特性を示している。そうすると、この場合の「かけ／たて」節はノ関係節にその点では近いということになる。

「リンゴの食べかけ」や「パンの焼きたて」にかかる解釈が可能である。先に見た(41)の数量詞の遊離についても、「2個のリンゴ」からの遊離ではなく、[2個の[リンゴの食べかけ]]からの遊離ということになる。

- (44) a. 太郎は**2個**のリンゴの食べ**かけ**を手にとって食べた。
b. 太郎は**2個**のパンの焼**きたて**を口にほおばった。

最後に他の後置詞に接続するかどうかであるが、主要部内在型関係節は「から」「に」「で」などが続くことが可能であるとしている。(Murasugi (1996)や三原(1994)、Hoshi (1995)では非文法文とされているが、黒田は容認可能な範囲にあるとしている。)

- (45) a. 警察は泥棒が店から出てきたの**から**盗んだ宝石を取り上げた。
b. 警察は泥棒が店から出てきたの**に**逮捕状を見せた。
(46) a. ナイフが机の上にあったの**で**リンゴを切った。
b. メリーはジョンがオレンジを沢山買ってきてくれたの**から**二つだけ選んだ。
(黒田の(56))

「かけ／たて」節においても以下のように、後置詞は問題なく許される。

- (47) a. 太郎は原稿の書きかけ**に**手を入れた。
b. 太郎は天ぷらの揚げたて**に**塩を振りかけた。
c. 花子は原稿の書きかけ**から**一枚コピーを取った。
d. 天ぷらの揚げたて**から**油がしたたっている。
e. 太郎はコーヒーの飲みかけ**で**カフェラテを作った。
f. 花子はパンの焼きたて**で**棚を飾った。

以上、まとめると以下のようなになる。

	「かけ／たて」節	主要部内在型関係節
(48) a. ガーノ交替	×	○
b. 名詞述語	○	×
c. 数量詞の遊離	○	○
d. 「その」／形容詞による修飾	○	×
e. 後置詞の接続	○	○

これらから言えることは、「かけ／たて」節は、S というより NP の特性を示しているということである。それらが、主要部内在型関係節と違い、(θ-役割の与えられない) NP として名詞述語になることが可能であり、「その」や形容詞による修飾が可能であるということは、D が NP を補部に取り DP であるということになる。一方で、「かけ」「たて」自身はアスペクトであったことから、一つの可能性としては、(49c)のようにDが補部にNPを取り、そのNPがアスペクト句(AspP)を取る構造が考えられる。

(49) a. [S リンゴが皿の上にあるの]を	黒田の構造
b. [DP [IP リンゴが皿の上にあるの] D]を	長谷川の構造
d. [DP [NP [AspP リンゴの焼きたて] N] D]を	「たて」節

4. まとめと今後の課題

本稿では、アスペクト形式の「かけ」と「たて」に焦点をあて、先ず基本的な3種類の使用法における叙述に関して、益岡(2008)の分類に基づき記述した。その上で、第4の使用法である「かけ」と「たて」が名詞的に働く使用法(「かけ／たて」節)について記述を行った。次に似た特性を示す主要部内在型関係節との比較を行い、その類似点と相違点を明らかにし、S (節) というより NP の特性を示すことを観察した。動詞の項及びアスペクト形式を含むことや、主要部内在型関係節との類似性から「かけ／たて」節と呼んだが、長谷川(2002)の DP 分析を踏ま

えると、DP が NP を取りその NP が AspP を補部として取る可能性が示唆されるが、その可能性の追求及び妥当性の検討は、他の関連する現象との比較も含めて今後の課題とする。

参照文献

- Hoshi, Koji. 1995. *Structural and Interpretive Aspects of Head-internal and Head-external Relative Clauses*. Ph.D. Dissertation, University of Rochester.
- 伊藤たかね, 杉岡洋子. 2002. 『語の仕組みと語形成』東京：研究社.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』東京：ひつじ書房.
- 金田一春彦. 1955. 「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』（金田一 編 (1976) 所収）
- 金田一春彦 編. 1976. 『日本語動詞のアスペクト』東京：むぎ書房.
- 岸本秀樹. 2000. 「非対格性再考」丸田忠雄・須賀一好 編『日英語の自他の交替』東京：ひつじ書房, pp. 71-110.
- Kuroda, S.-Y. 1974. Pivot-independent relative clauses in Japanese, I. *Papers in Japanese Linguistics* 3, pp.59-93. Reprinted in Kuroda (1992).
- Kuroda, S.-Y. 75/76. Pivot-independent relative clauses in Japanese, I. *Papers in Japanese Linguistics* 4, pp.85-96. Reprinted in Kuroda (1992).
- Kuroda, S.-Y. 76/77. Pivot-independent relative clauses in Japanese, I. *Papers in Japanese Linguistics* 5, pp.157-179. Reprinted in Kuroda (1992).
- Kuroda, S.-Y. 1992. *Japanese Syntax and Semantics*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- 黒田成幸. 1999. 「主部内在型関係節」黒田成幸・中村捷 編『ことばの核と周辺－日本語と英語の間』東京：くろしお出版, pp.27-104.
- 黒田成幸. 2005. 『日本語からみた生成文法』東京：岩波書店.

長谷川信子. 2002. 「主要部内在型関係節:DP 分析」 *Scientific Approaches to Language* No.1, pp.1-33.

姫野昌子. 1999. 『複合動詞の構造と意味用法』 東京: ひつじ書房.

益岡隆志. 2008. 「叙述類型論に向けて」 益岡隆志 編『叙述類型論』 東京: くろしお出版, pp.3-18.

松下大三郎. 1924. 『標準日本文法』 東京: 紀元社.

三原健一. 1994. 『日本語の統語構造—生成文法理論とその応用』 東京: 松柏社.

三宅知宏. 2005. 「現代日本語における文文化」 『日本語の研究』 第1巻3号, pp. 61-76.

Murasugi, Keiko. 1996. Head-internal relative clauses and the *pro*-drop parameter. 『金城大学論集 (英米文学編)』 37号, pp. 327-350.

森田良行. 1994. 『基礎日本語辞典』 東京: 角川書店.

中村重穂. 2001. 「「～たて」に関する一考察—「～たばかり」との比較を通して」 『北海道大学留学生センター紀要』 第5号, pp.16-30.

西山國雄・小川芳樹. 2013. 「複合動詞による助動詞化と無他動性」 遠藤喜雄 編『世界に向けた日本語研究』 東京: 開拓社, pp.103-133.

Ohara, Kiyoko Hirose. 1994. A correlative analysis of so-called internally-headed relativization in Japanese. Paper presented at the Annual meeting of the Linguistic Society of America.

佐久間鼎. 1957. 『現代日本語の表現と語法』 東京: 恒星社厚生閣.

高見健一・久野暲. 2006. 『日本語機能的構文研究』 東京: 大修館書店.

Tsubomoto, Atsuro. 1981. It's all no: Unifying function of *no* in Japanese. *Proceedings of the Chicago Linguistics Society* 17, pp. 393-403.

坪本篤郎. 1991. 「主要部内在型関係節」 安井稔博士古希記念論文集委員会 編『現代英語の歩み』 東京: 開拓社, pp.253-262.

- Tsujimura, Natsuko. 1992. Licensing nominal clauses: the case of deverbal nominal in Japanese. *Natural Language and Linguistic Theory* 10, pp. 477-522.
- Tsujimura, Natsuko and Masayo Iida. 1999. Deverbal nominal and telicity in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 8, pp. 107-130.
- Toratani, Kiyoko. 1998. Lexical aspect and split intransitivity in Japanese. *Proceedings of the Chicago Linguistics Society* 34, pp. 377-391.
- 山田昌史. 2005. 「結果の焦点化：「たて」構文の分析」『レキシコンフォーラム』No.1, 東京：ひつじ書房, pp. 267-293.